

(注) 記事中の「今月」や月表記のない日付の表記は、9月を指します。

① 学生がカンボジア・バタンバン市で家を作った際、工夫したことを記事の中から抜き出しましょう。

大雨による浸水が心配される地域で、浸水を防ぐ特殊なブロック塀を積み上げた。

② 記事の中から、日本と海外の違いが分かる部分を2か所抜き出しましょう。

- ・ライフラインや家具、電化製品がなかったりと、日本で当たり前と思っている生活が貧困地域ではそうではない
- ・世界の4人に1人はきちんとした家に住めていない

③ 国内外を問わず、あなたが大学に行ったり社会に出たときに、人のためにやってみたいことを考えてみましょう。

将来に向けて、夢をふくらませてみてください

カンボジアの低所得者のため、家を作るボランティアに汗を流す学生たち=8月、カンボジア



別府市の立命館アジア太平洋大学（APU）の学生団体「ハビタットAPU」が海外の貧困地域で家を作る活動を続けている。今年8月下旬に12日にわたってカンボジアに滞在し、建築作業に汗を流した。今月14日から25日まで、自転車に乗って福岡県や佐賀県を巡り、世界の貧困問題を伝える旅を続けている。

# 貧困地域に家を

## 学生団体「ハビタットAPU」



世界の貧困の状況を伝える自転車の旅の前に張り切る「ハビタットAPU」の学生たち

## 海外に滞在し 大工らと作業

8月20～31日、カンボジアのバタンバン市を学生10人が訪問した。家主となる自立を目指す女性や現地の

大工と共に作業。大雨による水害が心配される地域で、浸水を防ぐ特殊なブロック塀を積み上げた。作業ははかどり、屋根などを残してほぼ完成させた。

## 現状伝える自転車の旅も

「ハビタットAPU」は低所得者に安心して安価な住居を提供する国際NGO「ハビタット・フォー・ヒューマニティ」（本部・米国の学生支部。2006年に設立し、これまでにインド、スリランカ、フィリピンなどを16回訪れ、家を作った。

今回のプロジェクト代表を務めた北川楓子さん（アシア太平洋学部3年）は「ラ

14日からは、25日までの計画で学生13人が福岡、佐賀県の約600キロを自転車で移動。高校・大学5校を訪れて、今回のカンボジア訪問を含めた貧困問題を伝えている。家の大切さを実感しよう、道中の多くは野宿で過ごすという。

(2016年9月23日付朝刊別府面)